

# 学校嫌い感情に影響を与える要因の発達的变化

—大学生を対象とした回顧法を用いて—

小谷智歩 井上真理子 近藤龍彰

# 学校嫌い感情に影響を与える要因の発達的变化

—大学生を対象とした回顧法を用いて—

小谷智歩<sup>1</sup> 井上真理子<sup>2</sup> 近藤龍彰<sup>3</sup>

## The Developmental Change of The Factors Influence The Feeling of Aversion to School

—Using the Retrospective Method for University Students—

KOTANI Chiho<sup>1</sup>, INOUE Mariko<sup>2</sup>, KONDO Tatsuaki<sup>3</sup>

### 概要

本研究では、(A) 各学校段階間を通して学校嫌い感情および学校適応感は連続するのか、(B) 各学校段階を通して学校嫌い感情に影響する要因は変化するのか、を検討することであった。大学生110名を対象に、小学校、中学校、高校、大学（現在）の学校嫌い感情と学校適応感（教師関係・学校全体・学習関係・友人関係）について、回顧法を用いた質問紙調査を行った。

(A) について、学校段階間の全体的な変化を検討したところ、(1) 学校嫌い感情は小学校は他の学校段階と比べて低い、(2) 教師関係の適応は大学が他の学校段階と比べて低い、(3) 学校全体の適応は高校が他の学校段階と比べて高い、(4) 学習関係の適応は小学校のほうが大学よりも高い、(5) 友人関係の適応は高校のほうが大学よりも（有意傾向として）高い、の5点が示された。また、学校段階間の個人内の変化を検討したところ、(1) 学校嫌い感情は学校段階間を超えて個人内で相関する、(2) 教師関係の適応は小学校は中学校とは相関するが高校以降とは相関せず、中学校での適応が高校以降の適応と相関する、(3) 学校全体の適応は学校段階間を超えて個人内で相関する、(4) 学習関係の適応は小学校～高校までは相関するが大学とは相関せず、高校と大学でのみ相関する、(5) 友人関係は小学校～高校までは相関するが、大学とは相関しない、の5点が示された。

(B) について、学校段階ごとに重回帰分析を行ったところ、(1) 小学校・中学校では「教師関係」と「学校全体」が「学校嫌い感情」に有意な負の影響を与えていた、(2) 高校ではモデルの適合度は有意だが有意な影響を与えるものは見られなかった、(3) 大学ではそもそもモデルの適合度が有意でなかった、の3点が示された。

学校段階ごとの学校嫌い感情と学校適応感の発達的变化、および実践への示唆について考察した。

キーワード：学校嫌い感情、学校適応感、回顧法

Keywords：Feeling of aversion to school, School adjustment, retrospective method

## I. 問題と目的

### 不登校と学校嫌いについて

近年、不登校の児童・生徒が増加し続けているということが広く言われている。文部科学省では不登校を「学校を連続又は断続して年間30日以上欠席していて、何らかの心理的・情緒的・身体的あるいは社会的要因により、子どもが登校しない、あるいはしたくともできない状況にあるもの。ただし、病気や経済的理由によるものを除く。」と定義している。不登校の増加に伴って不登校の要因に関する研究は多く行われてきている。

欠席日数や学級担任の指導記録などから判断した不登校傾向がみられる「不登校児」の児童生徒は、学年が上がるにつれて増加する傾向にある（保坂、1995）。不登

校の「原因」については様々な考え方があがるが、不登校は心の問題ばかりではなく「学習の問題」「生活の問題」「家庭の問題」が絡み合った結果が示されたり（伊藤ら、2013）、「家庭教育力」「対人関係力」は不登校に大きく影響していると推察されている（赤羽根ら、2016）。また、小学校6年生と中学校1年生段階の不登校傾向に学校スキルが関与していること（五十嵐、2011）、大学生の不登校傾向に影響を及ぼす要因として、「自己否定感」「大学不適応感」「学業脱落」「心身不調」があることが示されている（堀井、2016）。大学生の不登校リスク要因としては「他者との交流」「学業成績および授業態度」「本人の見た目」「経済的問題」があり（荒井ら、2012）。また、不登校に関連した欠席願望を抑制する要因として「学校魅力」が大きく影響を与えることも示されている（本間、

<sup>1</sup> 金沢市立小立野小学校 <sup>2</sup> 富山大学医学薬学教育学部 <sup>3</sup> 富山大学人間発達科学部

2000)。

このような不登校研究の中で、子どもたちが不登校状態に陥るのを防ぐという点で注目されているのが学校嫌い感情である。学校嫌い感情とは、一般の児童・生徒が抱く学校に対する忌避的な感情と定義されている(古市, 1991)。これは、登校はしているがつらいと感じている、学校がいやだと感じている状態だと考えられる。この学校嫌い感情について検討することは、不登校の減少や防止につながり重要であると考えられる。なぜなら、学校嫌い感情は、登校している子どもにも(あるいは、登校している子どもでもあるからこそ)生じうる感情だからである。たとえば森田(2000)は1998年の中学2年生に対する調査で長期欠席の有無に関係なく、少しでも登校回避感情を抱いている生徒が約70%いることを示し、不登校の予備軍が多くいることを示唆している。不登校という行動で可視化される状態だけでなく、登校しているが「学校は嫌い」と感じている子どもの実態を把握することは、不登校を考える上でも、子どもの学校生活を充実させていく上でも、重要な作業である。

### 学校嫌い感情研究の現状

学校嫌い感情に関する研究は、小学校から大学まで、各学校段階を横断して幅広くなされている。小学校に関しては、たとえば藤井(2005)は、小学生を対象に児童の学校嫌いを生み出す原因を探るため「児童版学校嫌い傾向測定尺度」を作成し、信頼性・妥当性を検討した。その結果、学校嫌いを生み出す要因として「怠学感情」「学業不安」「教師関係」「友達関係」の4つの因子があることを示した。また、吉川・高橋(2008)は学校嫌い感情と友だちタイプとの関係を検討した。その結果、学校嫌い感情得点の高群と低群におけるソーシャルスキル得点のかかわりのスキルにおいて有意な差が見られ、人間関係のつながりのスキルの弱さ、学級への不満が学校嫌いを生み出していると示した。そして、学校嫌い感情が高い児童ほど学級集団の雰囲気や他者との関わりについて敏感に反応していることも示された。

中学校段階について藤井(2006)は、学校嫌いを生み出す原因及び学校嫌い水準を明らかにするために「中学生版学校嫌い尺度」を開発し、信頼性・妥当性を検討した。その結果、中学生の場合は学校嫌いの原因は「怠学感情」「劣等感」「友人関係」という3つの因子があることを示した。また、小出ら(2008)は、中学生を対象に不登校の予防の観点から学校嫌いに関する調査を検討した。その際、学校嫌い感情について扱うとその調査自体が学校に対するネガティブな感情を誘発する可能性があるとの懸念が生じたため、学校嫌い感情測定尺度(古市, 1991)各項目の表現をポジティブ表現に変え、学校好き感情測定尺度を作成した。そして登校理由と学校好き感情を調査し、学校好き感情尺度の分析を行った。その結果「登校必要」「登校習慣」「親圧力」の3つの因子が抽

出された。そして登校理由の尺度の分析を行った結果、「学校魅力」「親圧力」「習慣」の3つの因子が抽出された。このことより、中学生にとって何らかの魅力を感じて登校することが欠席願望の最大の抑制要因となっていることが明らかになった。さらに学校好き感情得点から、学校好き群・中間群・嫌い群の3群に分けて検討を行った。その結果、学校好き群は他の群より「登校必要」「登校習慣」が共に得点が高く、学校嫌い群の得点は「登校習慣」が低く、「親圧力」が高いことが示された。さらに、古市(1991)は学校嫌い感情に及ぼす性格や適応傾向との相対的影響を検討した結果、友人適応感が最も影響力をもっており、女子は教師適応も関係していると述べている。

高校段階の調査について、吉川・高橋(2007)では中学生と高校生を対象に、学校嫌い感情の高群と低群で比較し学校生活において満足感を形成する要因を検討した。その結果、予備調査段階では、高校生のみ、学校嫌い感情の高群と低群で自尊感情や自己受容の得点に差が見られたことを報告している。ただし、中学校の3学年を対象とした本調査においては、学校嫌い感情の高群と低群の間に、自尊感情や信頼感で差が見られたことを報告している。荻間澤・河村(2001)は、高校生を対象に、登校忌避感情の規程要因を検討している。その中で、登校忌避的感情に「学習への適応」「部活動への適応」「学級への適応」「教師への適応」「校則への適応」が影響を与えることを示している。

大学生を対象とした研究では、高橋ら(2003)は大学生・専門学校生を対象に、孤独感や自己の肯定的受容傾向が学校嫌い感情にどのように影響するかを調査した。その結果、学校嫌い感情は「学校に来て何も楽しいことはない」「私はこの学校が好きだ(逆転項目)」などの「对学校嫌悪」「学校さえなければ毎日楽しいだろうと思う」などの「学校消滅願望」「朝、なんとなく学校に行きたくないと思うことがある」などの「学校回避」の3つの下位感情に分かれることを示した。さらに、すべての学校嫌い感情に孤独感が影響していることも示した。

### 学校嫌い感情研究のまとめと課題

これまでの研究をまとめると、あらゆる学校段階で学校嫌いの子どもがいることは確実である。ただし、先行研究には大きく2点の課題が存在する。第一に、個人の中の連続性が検討されていない。小学校6年生時点と中学校1年生時点で調査を行い不登校傾向の変化と学校生活スキルとの関連を見た五十嵐(2011)は、小学校段階と中学校段階の不登校傾向の間に中程度の正の相関をみている。このように不登校傾向は連続するというのを考えると、学校嫌い感情や学校適応感もまた個人の中で連続していると思われる。すなわち、小学校段階で学校嫌いであったり不適応感を持っている子どもは、中学や高校、大学でも同様に学校嫌いであったり、学校適応感

を持っている、といったことが予想される。この点を明らかにすることで、適切な段階で重点的な介入や対策が可能になると考えられる。

第二に、学校嫌いに与える要因の発達的变化が検討されていない。先ほど見たように、先行研究では、それぞれの学校段階で学校嫌いに影響する要因は重なりを持ちつつ、若干異なっている。これは、発達段階や学校制度の違いによるものであろう。しかしこれまでの研究では、小学校、中学校、高校など区切って調査を行っており、各学校段階間で学校嫌いに影響する要因が異なるということは仮説的なものである。もちろん吉川・高橋（2007）のように、中学生と高校生を比較するといった研究もあるが、小学校から大学までの学校段階を通した要因の変化を検討したものは見当たらない。この点を明らかにすれば、各学校段階に応じた学校嫌いへの対応や予防の手立てを打ちやすくなると考えられる。

個人内での連続性や発達の変化をみる方法として、大きく2つの方法が挙げられる。第一に、同じ個人を時間軸にそって追跡していく縦断研究である。例えば、松浦・岩坂（2012）は、不登校経験者の高校入学から卒業までの自尊感情や抑うつ等の心理特性を測定している。ただし縦断研究はコストと時間がかかるというデメリットが存在する。第二に、同じ個人に過去のある時点のことを思い出して回答してもらう回顧法である。これは過去の自分を仮説的に想定して回答するというものであり、報告されたデータが必ずしもその時点（年齢）でのデータを正確に反映しているわけではないものの、先に挙げたコストと時間の問題を回避できる。実際、上加世田・若本（2010）は、大学生を対象に自分自身の高校時代の登校回避感情や登校理由を回顧法で調査を行い、登校回避感情が生じる理由・登校理由・登校し続ける理由を検討した。その結果、登校回避感情は友人や教師関係より倦怠感から生じること、登校理由への親による圧力は有意に低く、登校回避感情がありながらも登校した群はしなかった群よりも将来への展望が有意に高いことを報告している。このような回顧法のメリットに焦点を当て、本研究でも回顧法を用いた調査研究を行う。

## 本研究の目的

本研究では、(1) 各学校段階間を通して学校嫌い感情および学校適応感は連続するのか、(2) 各学校段階を通して学校嫌い感情に影響する要因は変化するのか、という2点について、回顧法を用いて検討する。

## II. 方法

### 調査対象

北陸地方にある国立大学の大学の1～4年生110名を調査対象とした。このうち、調査に参加し、かつ記入ミスがなかった106名を分析対象者とした。

### 手続き

調査は北陸地方にある国立大学で、2019年11月～12月に実施された。質問紙の表紙には、回答は任意であり、回答をしなくても不利益を被ることはないこと、回答によって個人が特定されることはないということが明記されていた。所要時間は10分程度であった。データ記入の不備のない106名のデータを収集した。

### 質問内容

フェイスシート 性別、年齢、所属(学部、学科)について尋ねた。

**学校嫌い感情測定尺度** 古市（1991）の学校嫌い感情尺度を用いた。12項目から大学生にはそぐわない内容と思われる「今のクラスはよくないので、ほかのクラスに代わりたい」の項目を除いた合計11項目を「1. まったくあてはまらない」～「5. とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。

**学校適応感尺度** 石田（2009）の学校適応感尺度を用いた。16項目を「1. まったくあてはまらない」～「5. とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。

### 手続き

「学校嫌い感情測定尺度」と「学校適応感尺度」の2つの尺度、計27項目を小学校～大学の計4回繰り返した。具体的には「あなたが小学校（中学校・高校・大学）の時について以下の項目はどのくらいあてはまりますか？」という教示のもと、質問紙に回答してもらった。質問の順番は小学校、中学校、高校、大学の順で固定した。

## III. 結果

### 変数の定義

古市（1991）では、学校嫌い感情尺度について特に因子構造には言及していないため、逆転項目（例：私は学校が好きだった）の得点を修正したのち、全11項目の平均を算出し、「学校嫌い感情得点」を算出した。

石田（2009）では、学校適応感尺度について、4因子構造が指摘されている。本研究でも、(1) 教師関係（学校では先生に安心して何でも相談できた、学校の先生に対して親しみを感じていた、学校の先生に対して不満があった（逆転項目）、学校では先生と気軽に話げできた）、(2) 学校全体（この学校の生徒であることを強く意識していた、この学校を離れるとしたらとてもつらいと思っていた、この学校の生徒であることがうれしかった、この学校の生徒であることを誇りに思っていた）、(3) 学習関係（学校では一生懸命授業を受けたいと思っていた、学校の授業はつまらなかった（逆転項目）、学校の授業を受けるのは楽しかった、学校の授業ではやる気がわい

た), (4) 友人関係 (学校の友達との関係に不満があった (逆転項目), 学校には良い友達がたくさんいた, 学校の友達とは何でも話すことができた, 学校の友達と一緒にいると楽しかった), の4因子を仮定し, それぞれの因子項目ごとに平均値を求め, 各因子得点を算出した。

### 学校段階間の全体的な変化

Table 1 に, 各学校段階の学校嫌い感情得点および4つの学校適応感因子得点の平均および標準偏差を示した。

学校段階による得点の経年比較を行うため, それぞれの得点に対して, 学校段階4 (小学校・中学校・高校・大学) の分散分析 (反復測定) を行った。その結果, 学校嫌い感情得点において, 有意な値が示された ( $F(3, 105) = 9.42, p < .001, \text{偏}\eta^2 = .08$ )。Bonferroniによる多重比較の結果, 小学校と中学校, 小学校と大学で有意な違い ( $p < .01$ ), 小学校と高校で有意傾向の違い ( $p < .01$ )が見られた。学校嫌い感情は小学校で最も低かった。

また, 学校適応感尺度のうち, 教師関係 ( $F(3, 105) = 10.68, p < .001, \text{偏}\eta^2 = .09$ ), 学校全体 ( $F(3, 105) = 11.32, p < .001, \text{偏}\eta^2 = .10$ ), 学習関係 ( $F(3, 105) = 5.61, p < .001, \text{偏}\eta^2 = .05$ ), 友人関係 ( $F(3, 105) = 2.81, p < .05, \text{偏}\eta^2 = .03$ ) で有意な値が示された。Bonferroniの多重比較の結果, 教師関係では, 大学が小学校・中学校・高校と比べて得点が低かった (いずれも  $ps < .001$ )。学校全体では, 高校が小学校・中学校・大学と比べて得点が高かった (いずれも  $ps < .01$ )。学習関係では, 小学校のほうが大学よりも有意に得点が高かった ( $p < .05$ )。また, 小学校のほうが中学よりも有意傾向で得点が高かった ( $p < .01$ )。友人関係では, 高校のほうが大学よりも有意傾向で得点が高かった ( $p < .01$ )。

以上をまとめると, (1) 学校嫌い感情は小学校は他の学校段階と比べて低い, (2) 教師関係の適応は大学が他の学校段階と比べて低い, (3) 学校全体の適応は高校が他の学校段階と比べて高い, (4) 学習関係の適応は小学校のほうが大学よりも高い, (5) 友人関係の適応は高校のほうが大学よりも (有意傾向として) 高い, ということが示された。

### 学校段階間の個人内の変化

学校段階ごとの個人内での連続性を検討するため, 各尺度得点間の相関分析を行った (Table 2)。本研究の目

的から, (1) 各学校段階間の学校嫌い尺度得点間の相関, (2) 各学校段階間の学校適応感尺度のそれぞれの因子得点間の相関 (教師-教師, 全体-全体, 学習-学習, 友人-友人) の2点に着目して結果を述べる (Table 2の灰色部分参照)。

(1) に関して, あらゆる学校段階の学校嫌い感情はお互いに正の相関を示していた。

(2) に関して, 小学校の「教師関係」の得点は, 中学校の「教師関係」と正の相関を示していたが, 高校や大学の「教師関係」とは有意な相関を示さなかった。中学校の「教師関係」の得点は, 高校および大学の「教師関係」の得点と正の相関を示していた。高校の「教師関係」の得点は大学での「教師関係」の得点と正の相関を示していた。

小学校の「学校全体」の適応は, 中学~大学の「学校全体」と正の相関を示していた。中学の「学校全体」の適応も高校と大学の「学校全体」と正の相関を示していた。高校の「学校全体」も大学の「学校」全体と正の相関を示していた。

小学校の「学習関係」の適応は中学校と高校の「学習関係」の適応と正の相関を示していたが, 大学の「学習関係」とは有意な相関を示さなかった。中学の「学習関係」は高校の「学習関係」と正の相関を示していたが, 大学とは有意な相関は示さなかった。高校の「学習関係」は大学の「学習関係」と正の相関を示していた。

小学校の「友人関係」の適応は中学校と高校の「友人関係」と正の相関を示していたが, 大学とは有意な相関を示さなかった。中学校の「友人関係」の適応は高校の「友人関係」とは正の相関を示していたが, 大学とは有意な相関を示さなかった。高校の「友人関係」の適応も大学の「友人関係」と有意な相関を示さなかった。

以上をまとめると, (1) 学校嫌い感情は学校段階間を超えて個人内で相関する, (2) 教師関係の適応は小学校は中学校とは相関するが高校以降とは相関せず, 中学校での適応が高校以降の適応と相関する, (3) 学校全体の適応は学校段階間を超えて個人内で相関する, (4) 学習関係の適応は小学校~高校までは相関するが大学とは相関せず, 高校と大学でのみ相関する, (5) 友人関係は小学校~高校までは相関するが大学とは相関しない, ことが示された。

Table 1 学校段階ごとの学校嫌い感情および学校適応感の平均と標準偏差

	小学校		中学校		高校		大学	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
学校嫌い感情	2.23	.62	2.55	.74	2.40	.73	2.58	.67
教師関係	3.27	.85	3.09	.86	3.23	.80	2.79	.69
学校全体	3.04	.93	2.96	.89	3.42	.96	2.86	.79
学習関係	3.32	.56	3.17	.51	3.17	.54	3.07	.49
友人関係	3.47	.49	3.46	.46	3.54	.46	3.37	.56

Table 2 各尺度得点間の相関分析の結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
1 学校嫌い尺度 (小学校)	1																			
2 学校嫌い尺度 (中学校)	.53**	1																		
3 学校嫌い尺度 (高校)	.45**	.45**	1																	
4 学校嫌い尺度 (大学)	.22*	.39**	.40**	1																
5 教師関係 (小学校)	-.52**	-.15	-.22*	-.05	1															
6 学校全体 (小学校)	-.53**	-.26**	-.29**	.03	.58**	1														
7 学習関係 (小学校)	-.28**	.13	-.12	.08	.36**	.37**	1													
8 友人関係 (小学校)	-.34**	-.18	-.15	-.05	.46**	.42**	.23*	1												
9 教師関係 (中学校)	-.21*	-.51**	-.20*	-.20*	.41**	.34**	.06	.28**	1											
10 学校全体 (中学校)	-.25**	-.47**	-.16	.07	.25**	.512**	.17	.20*	.57**	1										
11 学習関係 (中学校)	-.13	-.17	-.12	-.08	.08	.20*	.40**	.07	.36**	.28**	1									
12 友人関係 (中学校)	-.15	-.39**	-.14	-.08	.21*	.31**	.06	.47**	.48**	.43**	.20*	1								
13 教師関係 (高校)	.01	-.01	-.28**	-.01	.14	.09	.01	.13	.36**	.20*	.12	.26**	1							
14 学校全体 (高校)	-.15	-.06	-.31**	.16	.08	.31**	.12	.01	.16	.35**	.27**	.13	.46**	1						
15 学習関係 (高校)	-.06	.09	-.10	.01	.13	.14	.30**	.01	.22*	.13	.42**	.08	.38**	.31**	1					
16 友人関係 (高校)	-.13	-.20*	-.29**	-.13	.22*	.30**	.18	.25**	.30**	.22*	.18	.40**	.25*	.36**	.02	1				
17 教師関係 (大学)	-.03	-.02	.04	-.14	.11	-.06	.05	.04	.26**	.08	.01	.07	.24*	-.10	.21*	-.11	1			
18 学校全体 (大学)	-.07	-.10	.00	-.06	-.02	.20*	.09	-.01	.05	.25*	.00	.04	.16	.23*	.23*	.11	.15	1		
19 学習関係 (大学)	.15	.23*	.16	-.09	-.06	-.24*	.16	.00	.01	-.10	.18	-.10	.14	.06	.28**	-.13	.10	.17	1	
20 友人関係 (大学)	-.09	.08	.03	-.12	.26**	.15	.13	.09	.02	-.02	-.13	.04	.19*	.00	.08	.14	.13	.41**	.01	1

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

学校段階ごとの学校嫌いの要因の検討

学校段階ごとに、学校嫌いに影響する要因が異なるということを検証した。学校段階ごとに、学校嫌い感情得点を目的変数、教師関係、学校全体、学習関係、友人関係の因子得点を説明変数とした重回帰分析(強制投入法)を行った。Table 3に、それぞれの調整済み R<sup>2</sup> 値、分散分析の結果、説明変数からの標準偏回帰係数を示した。

まず小学校段階において、モデルの適合度は有意であった。学校嫌い感情に対して、教師関係と学校全体が有意な負の影響を与えていた。学習関係と友人関係からの有意な影響は示されなかった。

中学校段階において、モデルの適合度は有意であった。学校嫌い感情に対して、教師関係と学校全体が有意な負の影響を与えていた。学習関係と友人関係からの有意な影響は示されなかった。

高校段階において、モデルの適合度は有意であった。しかし、学校嫌い感情に有意な影響を与えるものは見

だせなかった。

大学段階において、モデルの適合度は有意ではなかった。

IV. 考察

本研究では、(1) 各学校段階間を通して学校嫌い感情および学校適応感は連続するののか、(2) 各学校段階を通して学校嫌い感情に影響する要因は変化するのか、を検討することであった。そのため、大学生を対象に、小学校、中学校、高校、大学(現在)の学校嫌い感情と学校適応感について、回顧法を用いた質問紙調査を行った。

学校段階間の学校嫌い感情と学校適応感の変化

全体的変化 各学校段階の学校嫌い感情および学校適応感の全体的な変化について述べる。

学校段階を独立変数とした分散分析を行ったところ、学校嫌い感情は小学校段階で最も低いという結果が示さ

Table 3 学校段階ごとの重回帰分析結果

	モデルの適合度				標準偏回帰係数 (β)			
	調整済み R <sup>2</sup>	自由度	F 値	有意確率	教師関係 (有意確率)	学校全体 (有意確率)	学習関係 (有意確率)	友人関係 (有意確率)
小学校	.33	F (4, 105)	13.88	$p < .001$	-.30 ( $p < .01$ )	-.32 ( $p < .01$ )	-.04 ( <i>n.s.</i> )	-.06 ( <i>n.s.</i> )
中学校	.30	F (4, 105)	12.09	$p < .001$	-.32 ( $p < .01$ )	-.23 ( $p < .05$ )	.04 ( <i>n.s.</i> )	-.14 ( <i>n.s.</i> )
高校	.12	F (4, 105)	4.50	$p < .01$	-.16 ( <i>n.s.</i> )	-.17 ( <i>n.s.</i> )	.02 ( <i>n.s.</i> )	-.19 ( <i>n.s.</i> )
大学	-.00	F (4, 105)	.95	<i>n.s.</i>				

れた。小学校から大学までを通して学校嫌い感情の変化を検討した研究は見当たらないが、不登校が中学校以降から増加してくるという一般的傾向を踏まえると、学校嫌い感情もまた、小学校段階ではあまり感じられないということなのかもしれない。ただし、いずれの学校段階でも平均値は3点以下であるので (Table 1), 基本的にはどの学校段階でも「嫌いである」という感情が生起しているというわけではないともいえる。

学校適応感のうち「教師関係」の適応は大学段階で最も低かった (有意傾向も含む)。記述統計的にも (Table 1), 他の学校段階が3点以上であるのに対して、大学では3点以下となっており、数値上の意味合いとして重要な点である。これは、小学校～高校に関しては学級担任制があり、「先生との関係性」というものが成立する一方、大学については、ゼミといった特殊な授業形態以外は特に近い教師関係が成立するというものではない。このことが、大学では「教師関係」の適応が他の学校段階よりも低いという結果につながったと思われる。

学校適応感のうち、「学校全体」の適応は、高校段階が最も高かった。記述統計的にも (Table 1), 高校段階の得点は3点を超過しており、適応感が高いと解釈できる数値であった。多くの場合、高校は小学校や中学校と異なり、自分で選択する進路であり、「学校全体」としてのイメージがつかみやすいと思われる。このような自己選択性が、小学校・中学校と比べて高校の「学校全体」への適応が高いという結果につながったのかもしれない。また、大学は高校と同様、自己選択の要素を持っているものの、高校では文化祭や運動会など、「学校全体」として参加しているイベントがある一方、大学では「学校全体」として想定されるものが少ない。そのことが、大学よりも高校のほうで「学校全体」の適応を高めた可能性が考えられる。

学校適応感のうち、「学習関係」の適応は、小学校のほうが中学校・大学よりも高かった (有意傾向も含む)。記述統計的には (Table 1) いずれの学校段階も3点程度あるので、適応が低いというわけではなく、小学校が他と比べて相対的に高いという意味合いとして解釈できる。一般的には、小学校の学習内容は中学以降の学習内容の基礎となるものであり、それだけに習得することが容易な部分や、習得させようとする周りの努力が引き出される。そのため、小学校の「学習関係」が他の学校段階よりも相対的に高くなることは自然と思われる。ただし、今回の結果では、小学校と高校段階での差が見られなかった。この理由については不明であるが、大学生を対象にしていることもあり、高校段階の学修を終えた (試験に合格した) という事態が、高校段階の「学習関係」の適応感を高めた可能性は存在する。

学校適応感のうち、「友人関係」の適応は、高校のほうが大学よりも有意傾向ではあるが高かった。記述統計的には (Table 1) いずれの学校段階でも「友人関係」

の適応感が高い (少なくとも中点は超えている) 値であり、この違いは相対的なものであろう。統計的にも有意傾向であることから、この差の理由も解釈が難しい。先述の自己選択性や「友人」のイメージのしやすさ (クラスや部活) などが、高校の「友人関係」の適応感を相対的に高めたのかもしれない。

**個人内の変化** 学校段階間での学校嫌い感情および学校適応感の個人内での変化を検討するため、学校嫌い感情と学校適応感の各下位尺度 (教師関係・学校全体・学習関係・友人関係) の学校段階間の相関分析を行った (Table 2)。

まず学校嫌い感情に関しては、すべての学校段階間で有意な正の相関を示していた。小学校 (中学校, 高校) で学校嫌い感情の高い人は、中学校 (高校, 大学) においても学校嫌い感情が高いということが示された。これらは、学校嫌い感情が学校段階間を超えて連続することを示唆している。このことは、小学校段階と中学校段階の不登校傾向の間に中程度の正の相関を見た五十嵐 (2011) の知見を、学校嫌い感情および高校から大学までの学校段階へと拡張する知見と言える。

次に、学校適応感の「教師関係」に関して、小学校の「教師関係」の得点は、中学校の「教師関係」と正の相関を示していた。一方、高校や大学の「教師関係」とは有意な相関を示さなかった。中学校の「教師関係」の得点は、高校および大学の「教師関係」の得点と正の相関を示していた。高校の「教師関係」の得点は大学での「教師関係」の得点と正の相関を示していた。つまり、小学校段階の教師関係の適応は中学校段階の教師関係の適応とは関連するが、そのあとの学校段階との教師関係とは関連をしない一方、中学以降の教師関係の適応はお互いに関連していたと言える。これは、教科担任制の有無という学校制度の違いが関わっているのかもしれない。いずれにせよ、「教師関係」の適応が個人内で長期的に関連してくるのは中学校以降であるという可能性が示唆された。

学校適応感の「学校全体」に関して、小学校の「学校全体」の適応は、中学～大学の「学校全体」と正の相関を示していた。中学の「学校全体」の適応も高校と大学の「学校全体」と正の相関を示していた。高校の「学校全体」も大学の「学校全体」と正の相関を示していた。学校嫌い感情と同じく、「学校全体」の適応は、学校段階間を超えてすべて関連していた。言い換えると、小学校 (中学校, 高校) で「学校全体」の適応感が高い人は、中学校 (高校, 大学) においても「学校全体」の適応感が高い、ということが示唆された。

学校適応感の「学習関係」に関して、小学校の「学習関係」の適応は中学校と高校の「学習関係」の適応と正の相関を示していたが、大学の「学習関係」とは有意な相関を示さなかった。中学の「学習関係」は高校の「学習関係」と正の相関を示していたが、大学とは有意な相関は示さなかった。高校の「学習関係」は大学の「学習

関係」と正の相関を示していた。つまり、小学校～高校までの学習関係の適応はお互いに関連するが、大学の学習関係の適応と直接関連するのは高校段階の学習関係の適応のみであった。これは、小学校から高校までの学習の連続性と、高校から大学までの学習の連続性が、質的に異なることを示唆する。高校までの学習は小学校・中学校の学習に基づいているのに対して、大学での学習は（主として）高校での学習（専攻）に基づいている、ということかもしれない。とはいえ、何がある学習の基礎となるかは一義的には決定できないものでもある。少なくとも個人内では、小学校～高校での学習の適応感と、高校～大学での学習の適応感のつながりは異なるものとして捉えられている可能性は存在する。

学校適応感の「友人関係」に関して、小学校の「友人関係」の適応は中学校と高校の「友人関係」と正の相関を示していたが、大学とは有意な相関を示さなかった。中学校の「友人関係」の適応は高校の「友人関係」とは正の相関を示していたが、大学とは有意な相関を示さなかった。高校の「友人関係」の適応も大学の「友人関係」と有意な相関を示さなかった。つまり、小学校～高校までの「友人関係」の適応はお互いに関連しているが、大学のみそれぞれと関連していなかった。これは、大学での友人関係は「学校」や「クラス」といった設定がされておらず、自ら何らかのコミュニティに所属することが求められるという特殊性が関わっているのかもしれない。渡邊・堤（2017）も、「大学新生にとって、大学生活を適応的に、また有意義に過ごすためには、友人関係を形成したり、維持したりする行動が必要である」（p.12）と述べている。いずれにせよ、小学校～高校まで「友人関係」で適応感を感じていた人が、必ずしも大学でも「友人関係」で適応感を感じるわけではないという結果は重要だと言える。

#### 学校段階ごとの学校嫌いに影響する要因の変化

各学校段階で、学校嫌いに影響する要因が変化するかについて、「学校嫌い感情」を目的変数、学校適応感の「教師関係」「学校全体」「学習関係」「友人関係」の各下位尺度を説明変数とした重回帰分析を行った（Table 3）。

小学校段階では、モデルの適合度は有意であり、「教師関係」と「学校全体」から有意な負の影響が示された。すなわち、「教師関係」と「学校全体」の適応度が高いほど、「学校嫌い感情」は低くなる、という結果となった。藤井（2005）では、小学生の学校嫌い傾向の要因として「怠学感情」「学業不安」「教師関係」「友達関係」の4つの因子を見出しているが、本研究ではその中でも特に「教師関係」や「学校全体」の影響があることを示した。一方、「学習関係」や「友人関係」は少なくとも統計上、有意な影響を示すことはなかった。

中学校段階でも小学校段階と同様に、モデルの適合度

は有意であり、「教師関係」と「学校全体」から有意な負の影響が示され、「学習関係」と「友人関係」から有意な影響は示されなかった。中学校段階で「友人関係」から有意な影響が示されないというのは意外な結果である。特に中学校段階は友人関係が重要かつ親密となってくる時期であり（e.g., 中間, 2014）、友人関係の適応が学校適応を規定する重要な要因であることが指摘されている（藤井, 2006）。この点について、本研究の参加者において友人関係の適応に大きな個人差がなかった（全体的には適応していたサンプルであった）という可能性や、回顧法という研究方法によるアーティファクトの可能性が存在する。この点はさらに検討する必要がある。

高校段階では、モデルの適合度は有意であったが、有意な影響を示す要因は見いだせなかった。大学段階ではそもそもモデルの適合度が有意ではなかった。

これらの結果をまとめると、学校段階ごとに学校嫌いに影響する要因が変化するか、という問題に対しては、消極的ながら「変化する」という回答が可能であろう。消極的というのは、小学校・中学校段階まで影響を持っていた要因（教師関係・学校全体）が高校段階では影響を持たなくなり、大学に至ってはそもそも学校適応感から学校嫌いを予測するというモデルそのものが成り立たなくなる、ということによる。言い換えると、「かつては影響を持っていた要因が影響を持たなくなる」という意味での「変化する」であり、「かつて影響を持っていなかった要因が影響を持つようになる」という意味での変化は見られなかった。

ただし、消極的とは言え、この結果は2つの点で重要である。第一に、かつて有効だった実践が発達段階によって有効ではなくなる可能性を示唆する。たとえば、今回の結果を踏まえると、小学校段階では教師関係が学校嫌いに影響する要因であるので、学校嫌い感情を低める（なくす）には、教師との関係性を充実させていくことが求められる。一方、この実践をそのまま高校に当てはめることはできない。高校ではもはや教師関係は学校嫌いに影響する要因ではなくなる可能性がある一方で、教師関係を充実させたとしても、少なくとも学校嫌いに対応する実践としては効果は得られないと考えられる。このことは、相関分析の結果からも言える。小学校段階から一貫して個人内で相関する要素（例：学校嫌い感情や学校適応感の「学校全体」）もあれば、学校段階間である種の「断絶」をしているように見える要素（例：学校適応感の「教師関係」、「学習関係」、「友人関係」）も存在する。これは、早期介入が有効な要素もあれば、後に介入する方が有効な要素もあるという実践観を提供する。たとえば「友人関係」の適応は、高校までであれば早期（小学校や中学校）で介入し、適応感を向上させることが有効であるかもしれないが、そのことは大学の「友人関係」とは関連しない。もし大学の「友人関係」の適応を向上させる実践が求められるのであれば、高校以前からの介

入というよりも、大学段階からの（あるいは大学独自の）実践が求められると言える。同様のことは、「学習関係」についても当てはまる（Table 2 参照）。以上の結果は、学校嫌いに対する「有効な実践」を考える場合、それぞれの発達段階を踏まえる必然性を提起する。

第二に、回顧法による調査の（一定の）妥当性を提起する。本研究では、大学生を対象に、同一人物に小学校・中学校・高校・大学の学校嫌い感情と学校適応感を尋ねた。これは、時間とコストを少なくできるというメリットがある一方、現時点での自分の視点に引張られ、正確な回答ではない可能性を排除できない。しかし、本研究では、多くの変数において、それぞれ違った結果が示されている。特に重回帰分析では、小・中学校と高校・大学で全く異なる結果が示されている。これは、参加者が「小学校から高校まで同じように回答した」場合には示されない結果であり、参加者が一定程度、小学校なら小学校、中学校なら中学校の時の自分の視点から回答してくれたことを保障する。実際、水谷・雨宮（2015）も、大学生を対象に小学校、中学校、高校段階でのいじめの経験が、大学生時点での Well-Being に影響するということを、大学生への回想法を用いて検証している。もちろんこれは「視点を区別していた」ということの証左であって、「そのデータを当時にとった時と同じ程度正確である」とは意味しない。とはいえ、同じ質問の繰り返しであっても、回顧法による調査の可能性はより検討されてもよいように思われる。

## まとめ

以上をまとめると、(1) 学校嫌い感情や学校適応感は学校段階間で変動するものの、個人内では一定程度相関する、(2) 相関の仕方は小学校から大学まで相関するものから、小学校から高校までで区切れるもの、中学校以降から相関するもの、といったいくつかのパターンが存在する、(3) 学校嫌いに影響する要因は、小学校・中学校と高校・大学によって異なり、「かつて影響していた要因が影響を持たなくなる」という形で変化する、の3点の知見が得られた。これらは、これまでの研究ではカバーされてこなかった広範囲の学校段階間の発達の变化を検討する試みであり、一定の意義があったと思われる。

## 今後の課題

今後の課題として大きく3点が挙げられる。第一に、サンプリングの問題である。今回の調査は国立大学の学生に行ったため、学習面に問題を抱えてこなかった学生が多かった可能性がある。この点について、より多様なサンプリングを行う必要がある。第二に、発達段階の区分である。今回の研究では小学校～大学まで大きく4区分であったが、小学校の中でも低学年、中学年、高学年といった区分があり、大学でも入学直後の1年生と就職活動などのイベントを控えている4年生では学校嫌い感

情や学校適応感に違いが見られる可能性はある。今後はより細かな発達区分を設定する必要がある。第三に、因果関係である。今回は学校嫌い感情に学校適応感が与える影響を検討したが、理論的には様々なパターンの因果関係が想定できる。この点についてはより広範囲の先行研究のレビューを行い、理論的に妥当な要因の選定とモデルの構築が求められる。

## 引用文献

- 赤羽根直樹・宮崎英夫・小池 守・河崎雅人.(2016). 中学校における不登校発生要因の解明に関する実践的研究—不登校を未然に防ぐために—. *帝京科学大学教職指導研究*, 1, 1-8.
- 荒井佐知子・石田 弓・大塚泰正・尾形明子・岡本祐子・兒玉憲一.(2012). 教員からみた大学生の不登校リスク要因の同定. *広島大学心理学研究*, 12, 93-101.
- 藤井義久.(2005). 児童の学校嫌いを生み出す原因に関する研究. *感情心理学研究*, 12, 1, 24-29.
- 藤井義久.(2006). 中学生の学校嫌い感情と怒りの関連. *感情心理学研究*, 13, 39-48.
- 古市裕一.(1991). 小・中学校の学校ぎらい感情とその規定要因. *カウンセリング研究*, 24, 123-127.
- 保坂 享.(1995). 学校を欠席する子どもたち—長期欠席中の登校拒否（不登校）とその潜在群—. *教育心理学研究*, 43, 52-57.
- 堀井俊章.(2016). 大学生の不登校傾向に影響を及ぼす心理的要因. *横浜国立大学教育人間科学部紀要*, 18, 106-114.
- 本間友巳.(2000). 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析. *教育心理学研究*, 48, 32-41.
- 五十嵐哲也.(2011). 中学進学に伴う不登校傾向の変化と学校生活スキルとの関連. *教育心理学研究*, 59, 64-76.
- 石田靖彦.(2009). 学校適応感尺度の作成と信頼性、妥当性の検討—生徒評定と教師評定を用いた他特性-他方法相関行列からの検討—. *愛知教育大学教育実践総合センター紀要*, 12, 287-292.
- 伊藤美奈子・小澤昌之・安田崇子・星野千恵子・福智直美・近兼路子・原 聡・鶴岡 舞.(2013). 不登校経験者の不登校をめぐる意識とその予後との関連：通信制高校に通う生徒を対象とした調査から. *慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要*, *社会心理学教育学：人間と社会の探求*, 75, 15-30.
- 上加世田寛子・若本純子.(2010). 高校生の登校回避感情と登校理由から考察する不登校とその支援—大学生を対象とする回顧法の質問紙調査から—. *鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要*, 5, 26-30.
- 荻間澤勇人・河村茂雄.(2001). 高校生の登校忌避感情と学校生活適応の関係. *日本心理学会総会発表論文*

- 集, 43, 245.
- 水谷聡秀・雨宮俊彦.(2015). 小中高時代のいじめ経験が大学生の自尊感情と Well-Being に与える影響. 教育心理学研究, 63, 102-110.
- 小出ひろ美・高橋美枝・鶴養美昭.(2008). 登校理由と学校好き感情についての一考察. 日本女子大学人間社会研究科紀要, 14, 107-116.
- 中間玲子.(2014). 青年期の自己形成における友人関係の意義. 兵庫教育大学研究紀要, 44, 9-21.
- 松浦直己・岩坂英巳.(2012). 不登校リカバリー群の心理的変容, 情緒および行動特性に関する縦断的研究. 教育実践開発研究センター研究紀要, 21, 119-124.
- 森田洋司.(2000). 「不登校」現象の社会学. 学文社
- 高橋 宗・水野邦夫・興津真理子・吉川栄子・上西恵史.(2003). 学校嫌い感情に及ぼす孤独感ならびに自己の肯定的受容傾向の影響について. 聖泉大学聖泉論叢, 11, 1-11.
- 吉川栄子・高橋 宗.(2007). 学校生活の満足感を形成

- する要因の検討—学校ぎらい感情からみた分析—. 聖泉大学聖泉論叢, 15, 207-220.
- 吉川栄子・高橋 宗.(2008). 学校ぎらい感情と友だちタイプとの関連. 聖泉大学聖泉論叢, 16, 75-88.
- 渡邊賢二・堤 貴之.(2017). 大学新入生の友人関係の変化と適応感との関連: 短期縦断調査より. 皇學館大學紀要, 55, 106-122.

## 付記

本論文は人間発達科学部に卒業論文として提出した研究を加筆・修正したものです。本論文の作成にあたって、ご指導・ご助言して下さった人間発達科学部教育心理コースの先生方に心より感謝申し上げます。また、調査にご協力いただきました皆様にも感謝申し上げます。

(2020年 8月24日受付)

(2020年 9月30日受理)

